早稲田大学大学院教育学研究科

博士学位請求論文

概要書

Ｓ．Ｔ．コウルリッジの宗教思想

―ユニテリアンからトリニテリアンへの軌跡―

直原　典子

2005年1月

1. 論文の目的

この論文の主要な目的は、コウルリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)の宗教思想の変遷を追い、思想内容を明らかにするとともにその意義を探ることである。特に筆者の関心は神の観念にある。コウルリッジは1790年代から1800年代半ばにかけてユニテリアン—神を信じるがイエス・キリストに神性を認めない立場を取る者—であったが、1805年以降トリニテリアン—イエス・キリストを神として信仰する立場を取る者—へと変わっていく。その変遷のなかで、コウルリッジ自身がどのような神の観念を抱いていたのか、あるいはどのように神の観念を表現し得たのか、そして彼の信仰は何を基底としていたのかが筆者の主要な関心事である。その関心の裏には、筆者自身の生きる時代において、いかなる神の観念を抱くことが可能であるか、あるいはいかに神を語ることが可能であるかという問いがあることも記しておきたい。

コウルリッジは1772年、イングランド教会の牧師の家庭に生れた。彼の生きた時代のイギリスにおける思想潮流の中心は経験論であった。経験論を土台として神学もまた語られた時代であり、時代の潮流に敏感に反応したコウルリッジは、20代では経験論的神学に共感を寄せている。しかし、時代はまさにフランス革命の動乱と流血のさなかにあり、ペイリー(William Paley)に代表される、経験論の基盤の上に立つ楽観的かつ功利主義的な神学のみで、コウルリッジの問題意識を癒すことは不可能であった。1790年代後半にはプラトンならびにプロティノス哲学に接近し、彼の思想は、経験論、観念論のそれぞれの範疇におさまらないものとなっていく。また彼自身が語るように、コウルリッジには、直観的信仰と合理的推論との対立・矛盾が長く問題となっていた。こうして彼の思想には、キリスト教とプラトニズム、啓示宗教と汎神論、実存的苦悩と合理的思考といった対立的な観点が複雑に絡まりあってゆく。

この論では、特に経験論と観念論、汎神論と啓示宗教の対立的観点に留意しつつ、それらを統合するものへ向かおうとするコウルリッジ思想の変遷をたどった。また、信仰というものが、あるいは神の観念を抱くということ自体が、合理的精神によってのみなされることではなく、人間の実存的苦悩の中からこそ生れるであろうとい

う考えから、コウルリッジ自身の実存的苦悩から極力目を離さずにコウルリッジ思想を辿ることに努めた。以下、章ごとに概要を記す。

2. 第1章から第4章までの概要

1) 第1章

第1章[1]においては、1795年から1796年にかけてコウルリッジが行った「啓示宗教、その腐敗と政治的視点についての講演」(“Lectures on Revealed Religion, Its Corruptions and Political Views”)に焦点を当てて、当時のコウルリッジの神学をウィリアム・ペイリーとの比較の中で明らかにすることを試みる。

ウィリアム・ペイリーの神学は、当時の「ポスト・ニュートニアン護教論」の流れを汲み、科学的、経験論的論証を用いながら、キリスト教の神学的論拠を探ろうとするものである。また、功利主義的立場から啓示宗教擁護の側に立つ。

コウルリッジは当時、ペイリーも依拠しているデイヴィット・ハートリー(David Hartley)の必然論に傾倒しており、ペイリー神学にも一定の共感を寄せ、講演は基本的にペイリーの実証的論証を支持するものとなっている。しかしながらその一方で、コウルリッジはペイリーと同じ楽観的な功利主義的立場を取ることはしていない。コウルリッジには原罪を抱える人間の実存への洞察があり、講演においてもこの点を問題提起している。しかし講演においてその回答が与えられていると言うことはできない。

第1章[2]においては、同じ一連の講演においてコウルリッジが繰り返し依拠して語る、もう一人の神学者ラルフ・カドワース(Ralph Cudworth)との関連をテーマとする。カドワースは17世紀ケンブリッジ・プラトニストの一人であり、『宇宙における真の知的体系』(*The True Intellectual System of the Universe*)において、プロティノス哲学に基盤をおく神学を構築している。彼は、観念論にもとづく有機的世界観を展開し、キリスト教とプロティノス哲学との融合をはかっている。コウルリッジは講演のなかで、カドワースの語る、神の「理解不可能性」(incomprehensibility)、「形成的自然」(plastic nature)、「始原的精神」(one original mind)の論を紹介している。コウルリッジはカドワースの論を用いて、講演における彼の神学の根拠を提示しよ

うとしているのである。

この講演においては、経験論にもとづくペイリー神学と、観念論に基づくカドワース神学とが混在して提示されており、全体として整合性のとれない講演内容になっていることは否めない。しかしながらこの事実は、経験論的思考と観念論的思考とを重層化させて同時進行させている、当時のコウルリッジの思考過程をそのまま表すものであるということもできる。

2) 第２章

第２章ではコウルリッジの初期の詩を扱う。(1)では、「宗教的瞑想」(“Religious Musings”)と「流出 XXXV」(“Effusion XXXV”)（のちに “The Eolian Harp”へ改題）に示された宗教思想を分析する。ユニテリアンとしての立場が色濃く投影されている「宗教的瞑想」には、コウルリッジ自身が解説するように、ハートリーの必然論にもとづく一節が見出される。善なる神との結びつきが人間の喜び(pleasure)であることが、人間と神との結合の必然性の根拠であることが語られ、人間と神との光り輝く合一のイメージが歌われる。しかしこの詩は同時に、当時フランスに進行していた革命の状況をも描いており、隣国における悲惨な状況は黙示録的終末世界と重ね合わされる。そして詩の後半において、「一者」から流出した「魂」による新たな天地の創造が—すなわちプロティノス的世界創造のイメージによって—語られている。このようにこの詩は、ハートリー的経験論とプロティノス的観念論とが、黙示録的終末世界のイメージをはさんで結合された構造となっている。この結合は詩的想像力によって可能となっているということができるであろうが、同時に思想的には、経験論と観念論との重層的思考を続けるコウルリッジの思考過程を反映したものということができる。

「流出 XXXV」は、結婚を間近に控えたコウルリッジが新居を定めた場所を舞台にして書かれたものである。愛の喜びとともに有機的世界との融合がハートリーの観念連合説、そしてさらにはネオプラトニックなイメージを用いて描かれている。しかしながら、この詩の最終部は、前半部との微妙な違和が存在する。彼の妻となることとなったキリスト教徒であるセアラが、詩人の哲学的想念を優し

く諌めると書かれる最後の一節には、ハートリー的経験論やネオプラトニックな世界観に傾倒し、正統的キリスト教から逸脱しつつある自らの思想性に対するある種の懐疑が表明されていると見ることもできるのである。

このように、「宗教的瞑想」と「流出 XXXV」には、ユニテリアンであったコウルリッジの思想が現れているが、それは必ずしも整合的なものではなく、詩人が経験論と観念論、汎神論的傾向と啓示宗教との間で、微妙な振り子運動をしていたことが窺われる。

詩人は、以後このような矛盾あるいは亀裂の統合へむけて努力を続けることになるが、その統合過程において重要な役割を果たしたものの一つに象徴(symbol)があった。(2)においては、「深夜の霜」(“Frost at Midnight”)と「老水夫の歌」(“The Rime of the Ancient Mariner”)で用いられる象徴を分析する。

コウルリッジによれば、象徴とは、無限を指し示す有限、全体を表す部分と定義づけられている。無限なものあるいは存在の全体性は、常に人間の認識の範疇を超える「理解不可能な」(incomprehensible)ものであるが、象徴は少なくともその無限性、全体性を半透明に映し出すものと考えられる。このような象徴論がコウルリッジによって展開されるのは 1810 年代の後半であるけれども、これらの詩には、象徴としての機能を果たすさまざまな表象を見出すことが可能である。象徴を用いることによって、「深夜の霜」には有機的自然、そして神との結合の希望が、「老水夫の歌」には神による人間の罪の贖いへの希望が描き出されていると考えられる。

第 2 章(3)では、「クリスタベル」(“Christabel”)と「失意のオード」(“Dejection: An Ode”)を取り上げる。「クリスタベル」で分析するのは、この詩に現れた原罪意識である。コウルリッジ自身、自らの原罪意識を書簡において明確に表明しているが、この詩には彼の原罪意識が色濃く投影されていると考えられる。ここで筆者が注目したことは、描かれた原罪が、人間の生まれながらの罪への傾向であるばかりでなく、人間の意識的統御を超える無意識の次元で生じるものであるということである。「為そうとして為すのではなく、為してしまう罪」と考えられる原罪への洞察がこの詩では行われている。原罪意識は、神のもとから遠く離れた存在であることを自覚する、

人間の実存的苦悩であると言うことができる。コウルリッジの信仰の基底には、こういった人間の実存的苦悩が明らかに横たわっている。

「失意のオード」には、詩的想像力を失った詩人の苦悩と再生への苦闘が描かれている。この詩が創作された 1802 年は、コウルリッジが家庭的な不和に悩んだ時期であったと同時に、確かな宗教的信条を失っていた時期でもあった。すなわち、ハートリーの必然論を信奉することができなくなりユニテリアンとしての立場を放棄したものの、いまだキリストを神として信じるトリニテリアンとしての自己の確立に至らない、コウルリッジにとって思想的、宗教的谷間にあたる時期である。ハートリー的世界観においては、自然との一体感はすなわち神との合一感でもあり、自然はそのまま神の存在を顕すものであった。しかし、自己の実存的苦悩の深さ（＝神と人間との間の亀裂）を意識したことによって、またおそらくはカドワース哲学やドイツ観念論に触れることによってハートリー哲学の不整合性に気付いたコウルリッジは、自然と神との間に横たわる亀裂を意識せざるを得なくなっていた。自然は既にそのまま神の存在を示すものではなくなっており、彼は新たに神と人間とを結合する哲学的契機を見出す必要があった。

「失意のオード」にこの哲学的契機が描かれていると言うことはできない。しかし詩の後半において、詩人の視線は、自然ではなく魂の内部、意識の内側に深く沈潜している。詩人は、自然に目を向けることを一時中断して、自己の意識、心という舞台において神を直接感じようとしている。詩の最終部に漂う静けさは、失意の底において、神の愛への直感が詩人の心に起こり得たであろうことを、窺わせるものであると筆者は考えている。

いずれにしても「クリスタベル」、「失意のオード」の二つの詩には、コウルリッジの実存的苦悩が描かれており、それは裏を返せば、神による贖いへの希求へと繋がってゆく。事実コウルリッジは 3 年後の 1805 年、自らがトリニテリアンとなったことをノートに記している。

3) 第 3 章

1805年、コウルリッジは自らがトリニテリアンであることを書き記したが、コウルリッジの思想的経緯は、常にある種の直観が先立ち、そののち長い歳月をかけてその哲学的論証を試みるという順序をたどる。したがってこの後コウルリッジは、直観的信仰と合理的推論、経験論と観念論の統合、そして啓示宗教による汎神論の統合に向けて、長い思索を展開していくこととなる。第3章では、ワーズワス、ハズリット、スピノザ、カントとの関連の中で、コウルリッジの思想がどのように展開していったかを扱う。

第3章(1)においてはまず、ワーズワスの「行商人」(“The Pedlar”)と「ティンタン修道院より数マイル上流にて詠める詩」(“Lines Composed a Few Miles above Tintern Abbey”)を分析し、ワーズワスの自然信仰と言われるものの内実を探る。ワーズワスは、自然を神と同一視する汎神論的傾向を指摘されることが多いが、彼の信仰は決して汎神論と言われるべきものではない。彼は神の存在を直接認識できると考えず、自然の中に、自然を通して神の存在を見ている。しかし、自然の中に宿る神は、同時に自然を超越する絶対的存在であり、また人間に対し限りない愛を注ぐ存在でもあるとも書いている。この点において、ワーズワスとコウルリッジの間には、微妙なずれはあるものの、明確な相違はない。両者には明らかな共振関係が存在する。

しかしコウルリッジは、超越的神と人間との関係を認識する哲学的確証を求めた。それは哲学と宗教との究極の一致をめざすということでもあった。コウルリッジは自らは哲学的大作『ロゴソフィア』(*Logosophia*)において、盟友ワーズワスには哲学詩『隠士』(*The Recluse*)において、哲学と宗教とを統合することを求めた。二つの構想はどちらも未完に終わったが、コウルリッジはその後の哲学的・神学的著作によって、ワーズワスはその後の詩作において、これを試みたということができる。

(1)の後半はスピノザとコウルリッジの関係を扱う。コウルリッジがスピノザを読んだ記録は1799年から確認されるが、1810年代初めに精読し、1810年代後半にスピノザに対する覚書を書き残している。コウルリッジによるスピノザ批評は賞賛と批判の混ざり合う両義的なものである。神学と哲学とに分類してコウルリッジの言説を

考えてみるならば、おおよそ以下のように言うことができる。コウルリッジはスピノザ神学をユニテリアニズムと捉え批判したが、信仰者としてのスピノザへの尊敬と寛容とを抱き続けていた。哲学者スピノザに対しては、その論理的整合性に対して高い評価をくだしたが、一方スピノザ哲学を汎神論と明確に規定し批判した。

コウルリッジのスピノザ受容において重要な点は、スピノザ哲学がカント哲学とともに、最終的な経験論的神学との訣別へとつながった点にあると考えられる。すなわち、哲学的体系の出発点を経験的次元にある実体に措くならば、論理的整合性を徹底していくと、経験的次元の中から抜け出し、超越的神へと到ることは不可能であるということへの確信を、スピノザはコウルリッジに与えた。スピノザ研究は、コウルリッジが哲学的出発点を観念論的次元に措く—正確におくならば極理論を基底とする観念論的次元に措く—最終的決断を与えたということができる。

第 3 章(2)においては、ハズリットによる『政治家必携の書』(*The Statesman's Manual*)批判を扱う。当時共和主義の論客であったハズリットは、『エディンバラ・レヴュー』と『エグザミナー』にコウルリッジに対する批判を展開している。この論では特にその政治的立場への批判と神学的・哲学的立場への批判を分析した。特に神学的対立点について述べるならば、ハズリットは経験論的立場からコウルリッジへの批判を試みているが、コウルリッジの独自の観念論とは議論がかみ合っていない。コウルリッジは、ヴォルテールを初めとする啓蒙思想家たちに見られる懐疑主義と、イギリスにおける功利主義的神学を、観念論の立場から超克することを目指していたが、政治的には共和主義、神学的には経験論を土台とするユニテリアンであったハズリットとの間に明確な対立が見られたのである。

第 3 章後半では、コウルリッジのカント（特に『純粋理性批判』）受容を扱う。カント哲学の重要性は、認識を成立させるためには、認識に先立って主体の側の能動的機能が重要な役割を果たすことを明確にし、認識を受動的なものとして見る経験論に反駁した点にあった。コウルリッジは、時空間が感覚のアプリオリな形式であること、アプリオリな悟性概念が認識に統一を与えること、根源的統覚による自己意識の統一が対象に先立つものとして存在すること、超

越的(transcendent)ということと先験的(transcendental)ということは区別されるべきことなど、カントの先験的哲学をほぼ忠実に辿り受容している。しかしその一方、理性の定義に関しては際立った相違が存在する。カントが理性のもつ理念が、悟性による認識を統制するものであって、その理念の実在性を認識するものではないことを主張するのに対し、コウルリッジは、理性を超感覚的なものの実在性を認識するものとして定義する。

この違いは、コウルリッジ哲学において極めて重要なポイントである。超感覚的存在、霊的存在の認識は、神の認識に繋がるものであり、コウルリッジの神学において不可欠なものであった。したがって、理性が霊的な存在の実在性を認識する精神機能であるとする根拠を、コウルリッジはカント哲学とは別に求める必要があった。

4) 第 4 章

第 4 章では、理性による霊的存在の認識の根拠となる「極理論」(the polar principle)と、「極理論」に基づくコウルリッジの「三位一体論」（＝トリニテリアニズム）に関して考察する。「極理論」は、自然ならびに霊的世界におけるあらゆる力は、力の顕現に際して対立物を発展させるという考え方である。これを人間の認識の側から捉え返してみるならば、人間の認識レベルにおいては、常に二極の作用が働くということである。これをコウルリッジは、直線の中点の認識とも説明する。無限に延びる直線の両端の認識は人間には不可能であるが、人間はその中点を認識する—中点は二極の作用が釣り合った中和点であると説明される—ことで直線の存在を知る。この場合人間には中点に働く二極の力の作用が認識されている。

そして、ここで重要なことは、二極から働きかける力とは、人間から見て必ずしも同一次元のものではないということである。それは大きく言えば、経験的次元における力と霊的次元における力の二極の作用と考えることもできる。人間は存在の認識において、カントが語るように決して全体の認識には至らない。極理論における認識とは、全体の認識ではなく、ある一点に働く二極の作用の認識である。認識において、経験的次元における客体の認識と同時に、その客体を生成する霊的次元における力の二極の作用が認識される。

人間の認識は常に経験的認識を通して、霊的次元の力の存在を認識することとなる。それは経験的次元、霊的次元のどちらにおいても、全体性の把握には及ばないが、その実在性の認識にはなり得る。コウルリッジの認識論はこの極理論を土台にして、悟性による経験的認識、理性による霊的存在の認識を語る。

そして、さらにこの極理論的認識論は、二極の作用を統合するものの存在への考察へと繋がってゆく。人間の有限な認識能力においては、存在の全体性の認識は不可能であり、認識は常に二極の力の作用の認識となる。しかし二極の存在は、二極の作用の源となる根源的存在を論理的に導きだす。すなわち、二極の作用とはある一つの根源的な存在の二極の現れであることが考察される。

この時点において、コウルリッジの思考は既に神を対象としている。存在の根源としての神は、常に経験的現象を通してその霊的力を及ぼす。人間は限られた認識能力において、経験的現象の認識と同時に、その経験的現象を生成する霊的次元の力の作用を認識する。コウルリッジにとって、この霊的存在の力の作用の認識を保証するものは、人間の霊的力である意志にほかならない。人間の意志は、神の意志の働きかけ（霊的存在である神の力）に呼応する。

極理論に基づき展開される認識論を、コウルリッジは「方法の原理」(the Principle of Methods)とし、さらに意志による霊的力の認識を「意志の方法」(the Methods of the will)と名付けている。またここで、神の意志を志向する人間の意志は、彼にとって論理的に導き出されたものであるというよりは、実存的確信に近いものであると筆者が考えていることを付け加えておきたい。彼にとっての実存的確信とは、ときに神との果てしない距離に圧倒される罪深き人間の、救済への希求と言い換えることも可能である。

第４章の最終節(4)は、コウルリッジの「三位一体論」を整理する試みである。彼が「三位一体論」の図式において、神の観念をどのように表しているか、彼のテキストから整理してみた。そして、この図式の下にコウルリッジによる理性、悟性、想像力、意志、良心に関する論を再度整理してみたのは、コウルリッジの考えに沿って、人間を神に包含された存在として位置付け直してみることによって、人間の精神機能についてコウルリッジの語ることがより明確になる

と考えたためである。

章の最後では、神と人間とを繋ぐものとして、神の「言葉」（＝ロゴス）と人間の言語との関連を考えた。アウグスティヌスは、神の「言葉」と人間の言語とが、類比的関係にあることを指摘するが、コウルリッジはアウグスティヌスの論に沿いながら、同時に彼の認識論ならびに悟性・理性・想像力の論を用いて、より論理的な厳密さをもって、神の「言葉」と人間の言語との関連を考察している。そして、アウグスティヌスもコウルリッジもともに、人間を神の「似像」（アナロジー）とすることこそが、あるいは人間の知に届き得る「言葉」として神が自らを啓示したことこそが、神の人間への愛を示すものであると考えている。

3. 結論

最初に書いたように、この論文の目的は、コウルリッジが神の観念をいかなるものとして、またいかに表現し得るものとして考えたかを明らかにすることであった。この論は、このことについてのある一つの方向からの試論である。

そして、コウルリッジが 19 世紀初頭に考えたことが、200 年後の現代にどのような意味をもち得るかに関して述べるならば、筆者は、コウルリッジ思想の豊かさは、現代においてなお、生きる希望を与える光を投げかけるものであると考えている。